

研究紀要第262号

G9 - 03

研究紀要第二六二号

「言語の使用場面と働き」を意識した学習指導の工夫に関する研究
平成十七年二月
岡山県教育センター

「言語の使用場面と働き」を意識した 学習指導の工夫に関する研究

平成17年2月

岡山県教育センター

まえがき

現在，学校教育においては，子どもたちに，基礎的，基本的な内容を確実に身に付けさせ，それを基に自分で課題を見付け，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力，豊かな人間性，健康や体力などの「生きる力」を育成することがますます重要になってきています。このような教育改革を推進するに当たって，学校教育の質的な転換が求められており，そのためには，具体的な指導方法や指導体制等の工夫改善についての研究・実践を深めるとともに，教員の資質・指導力の向上を図ることが重要課題となっています。

そこで，岡山県教育センターでは，教育に関する専門的，技術的事項の調査研究，教育関係職員の研修，教育相談，教育情報の収集・蓄積・発信等の諸事業を通して，学校教育の支援を行っています。特に，調査研究においては，国の教育改革の動向と本県の教育課題を踏まえ，幾つかの研究主題を設定して共同研究・個人研究を行い，その成果の提供と普及に努めています。

経済・社会等のグローバル化の進展に伴い，場面に応じた適切な表現を用いて英語でコミュニケーションを行う力の育成が急務となっています。英語の授業においても，生徒の実態に応じた具体的な「言語の使用場面と働き」を設定し，興味・関心を引き出しながら「実践的コミュニケーション能力」を養うことが求められるようになってきています。本研究では，「言語の使用場面と働き」に配慮した言語活動を行うために必要な考え方を整理し，言語活動を取り入れた学習指導の工夫についての提案を行っています。

御高覧の上，御意見，御批判をいただくとともに，学習指導要領の趣旨に沿う教育実践のための資料として御活用いただければ幸いです。

終わりにになりましたが，この研究を進めるに当たり，御協力をいただきました協力委員の先生方並びに関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成17年2月

岡山県教育センター 所長

浮田 信明

目 次

研究の要旨.....	1
はじめに.....	2
研究の目的.....	2
研究の内容.....	3
1 旧学習指導要領の下での外国語科の課題	3
(1) 英語指導方法等改善の推進に関する懇談会報告.....	3
(2) 教育課程実施状況調査（高等学校）.....	3
2 高等学校学習指導要領の下で求められる「実践的コミュニケーション能力」.....	3
(1) 「実践的コミュニケーション能力」とは.....	3
(2) 「実践的コミュニケーション能力」を養うためのコミュニケーション活動.....	4
3 「言語の使用場面と働き」.....	4
(1) 「言語の使用場面と働き」についての基本的な考え方.....	4
(2) 「言語の使用場面と働き」の例.....	4
(3) 「言語の使用場面と働き」の設定.....	6
4 コミュニケーション重視の教授法(Communicative Language Teaching).....	6
(1) コミュニケーション重視の教授法の基本的な考え方.....	6
(2) コミュニケーション重視の教授法に基づく指導の考え方.....	6
5 「実践的コミュニケーション能力」を養う授業についての基本的な考え方.....	8
実践事例について.....	8
1 実践事例 1	8
2 実践事例 2	8
3 実践事例 3	9
実践事例 1	10
実践事例 2	15
実践事例 3	19
おわりに.....	23

「言語の使用場面と働き」を意識した学習指導の工夫に関する研究

高等学校学習指導要領
外国語

「英語が使える日本人」
の育成のための行動計画

研究の目的

「言語の使用場面と働き」に配慮した言語活動についての考え方を整理する。
「言語の使用場面と働き」に配慮した言語活動を取り入れた学習指導の工夫を提案する。

研究の内容

- 1 旧学習指導要領の下での外国語科の課題
- 2 学習指導要領の下で求められる「実践的コミュニケーション能力」
- 3 「言語の使用場面と働き」
- 4 コミュニケーション重視の教授法
- 5 「実践的コミュニケーション能力」を養う授業についての基本的な考え方

実践事例

スキットの
創作

電子メールの
活用

“Active Listening”
の利用

研究の概要

外国語科（英語）においては「言語の使用場面と働き」を授業の中に位置付け、興味・関心を引き出しながら「実践的コミュニケーション能力」を養うことが求められている。授業を構想し実践する中で、生徒の実態に即した具体的な「言語の使用場面と働き」の設定と、効果的な提示の仕方の工夫など、英語の授業における学習指導改善の方向が見えてきた。

キーワード 外国語，実践的コミュニケーション能力，言語の使用場面，言語の働き，コミュニケーション活動

はじめに

平成15年度に文部科学省から示された「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」において、「経済・社会等のグローバル化が進展する中、子どもたちが21世紀を生き抜くためには、国際的共通語となっている『英語』のコミュニケーション能力を身に付けることが必要である」と述べられている⁷⁾。そこには、国民全体に求められる英語力を「中学校・高等学校を卒業したら英語でコミュニケーションができる」とし、中学校卒業段階では、「挨拶や応対、身近な暮らしに関わる話題などについて平易なコミュニケーションができる」、高等学校卒業段階では、「日常的な話題について通常のコミュニケーションができる」ことが指標として掲げられている。英語の授業においては、英語をコミュニケーションの手段として使用する活動を積み重ね、これを通して、語彙や文法などの習熟を図り、「聞く」「話す」「読む」「書く」のコミュニケーション能力の育成を図っていく指導とともに、学習者が自分を表現し、相手を理解することができた成就感や学ぶ楽しさを味わうことができ、さらに、英語ができることの意義、必要性や、そのことによって広がる世界や可能性に興味や関心を持つことができるよう、指導を工夫することが求められている。

このことは、日本人の多くが、英語力が十分でないために、外国人との交流に制限を受けたり、適切な評価が得られなかったりするといった事態が生じているという現状を打破するためには、英語教育を抜本的に改善することが緊急の課題であることを示している。

「コミュニケーション能力」という言葉は、平成元年告示の高等学校学習指導要領（以下「旧学習指

導要領」という。）において初めて使われた。それ以降、各学校において「コミュニケーション能力」を養うための様々な取り組みがなされるようになった。しかし、その取り組みの中には、機械的なドリル練習やゲーム活動のみで終わってしまい、実際に活用する場面につなげる指導が十分に行われていない状況が多々見られた。

そのため、平成11年告示の高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）においては、教科の目標に「情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。」ことが掲げられ、実際に役立つコミュニケーション能力を養うことが強調された。そして、「実践的コミュニケーション能力を養う」ための授業が行われるように、初めて[言語の使用場面]と[言語の働き]の例が外国語科（英語）の科目すべてに示された。これは、コミュニケーションにおいては、常に、言語はある具体的な場面において具体的な働きを果たすために使用されるという認識に立ったものである。

このような状況の中、外国語科（英語）の教師に今求められていることは、生徒が「実践的コミュニケーション能力」を身に付けることができるように、現実的な「言語の使用場面」の中で、現実的な働きを持たせて言語材料を使用することに最大限配慮した授業を構想し実践することである。

研究の目的

研究の目的は、次の2点である。

「言語の使用場面と働き」に配慮した言語活動を行うために必要な考え方を整理する。

「言語の使用場面と働き」に配慮した言語活

動を取り入れた学習指導の工夫について提案する。

研究の内容

1 旧学習指導要領の下での外国語科の課題

ここでは、学習指導改善の手掛かりを探るために、外国語科において、これまで指摘されてきた指導方法の課題や生徒の学習状況について整理する。

- (1) 英語指導方法等改善の推進に関する懇談会報告
平成13年1月に出された、「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会報告」の中で、外国語科の授業に関する問題として、次の2点が指摘されている¹⁾。

文法訳読式中心の授業になったり、教師の一方的な授業になったりすることが多く、英語による対話やディスカッションなどを取り入れている授業はまだ少ない。

高等学校においては、大学入試を意識し、高学年になるに従って音声重視の授業が軽視されたり、相変わらず英文和訳や和文英訳、文法解説が主になっている。

現在では、学習指導要領に基づき、外国語科の授業の改善が進められ、生徒の「実践的コミュニケーション能力」が向上してきているという報告もされているが、依然として文法訳読式が中心の授業が行われているという現状は否めない。

- (2) 教育課程実施状況調査（高等学校）

平成14年に旧学習指導要領の下での生徒の学習状況を把握するために、全国の高等学校第3学年10万5千人の生徒に対し学力調査（ペーパーテスト、アンケート調査）が実施された。

その中の、「話すこと」に関する学習についてのアンケートの結果を、図1に示す。

「聞くこと」「書くこと」に関する学習についてのアンケートも、「話すこと」と同様に、「よく分からなかった」が「よく分かった」を上回るという結果になった。この調査では、「よく分からなかった」と回答している生徒の割合が、「読むこと」以外では50%を超えており、指導方法の改

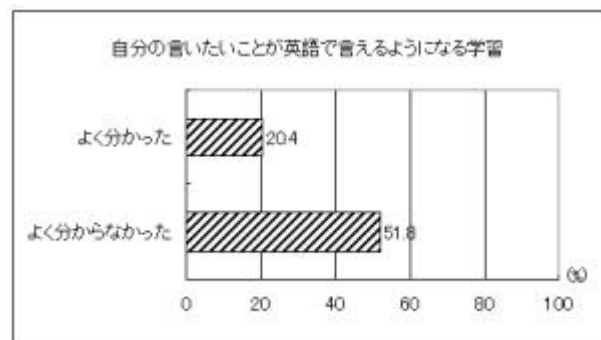


図1 「話すこと」の調査結果

善を行うことが不可欠であることが分かる。

また、ペーパーテストの結果においては、英語を聞いて理解することはある程度できるが、その一方で、話し掛けの内容や意図をとらえて適切に応答する力は不十分という分析がなされている。そして、この結果を踏まえ、指導上の改善点として、具体的な場面やふさわしい表現を使って応答したりまとまりのある一定量の文章を書かせるような指導の工夫が必要であると指摘されている。

- 2 高等学校学習指導要領の下で求められる「実践的コミュニケーション能力」

ここでは、本研究に直接つながる「実践的コミュニケーション能力」とその育成にかかわるコミュニケーション活動について、それらが学習指導要領においてどのように求められているかを整理する。

- (1) 「実践的コミュニケーション能力」とは

平成10年7月に出された教育課程審議会の答申における外国語科の改善の基本方針の一つに、実際に外国語を使って外国の人々とコミュニケーションできる能力である「実践的コミュニケーション能力」の育成にかかわる指導を一層充実させることが挙げられている。この「実践的コミュニケーション能力」について、高等学校学習指導要領解説外国語編では、次のように説明されている¹⁾。

「実践的コミュニケーション能力」とは、外国語の音声や文字を使って実際にコミュニケーションを図ることができる能力である。すなわち、外国語を使って、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりして、通じ合うことができる能力である。

なお、コミュニケーション能力については、研究領域等によって、様々な考え方が存在するが、本研究においては、この考え方に基づき、研究を進めることにする。

(2) 「実践的コミュニケーション能力」を養うためのコミュニケーション活動

新里(2000)は、外国語の授業における「コミュニケーション活動」とは、「生徒が設定された場面において、英語を使って『情報や相手の意向などを理解したり自分の考えを表現したりする』実践的な活動」と説明している²⁾。つまり、「コミュニケーション活動」とは、生徒が情報や考えの受け手や送り手になってコミュニケーションを行う活動であり、「実践的コミュニケーション能力の育成」を図る際の中心となる学習活動である。

「コミュニケーション活動」を行う基本的条件は、次の3点にまとめることができる。

情報や考えなどを伝え合うことを活動の中心とすること。

生徒が情報や考えなどの受け手や送り手になるようにすること。

具体的な言語の使用場面を設定すること。

「コミュニケーション活動」は、この基本的条件を十分に配慮しながら行うようにし、コミュニケーションに必要な文型、文法事項を、実際に「コミュニケーション活動」を行う中で身に付けていくことができるようにする必要がある。

3 「言語の使用場面と働き」

ここでは、学習指導要領に示されている「言語の使用場面と働き」についての基本的な考え方とその取扱いについてまとめる。

(1) 「言語の使用場面と働き」についての基本的な考え方

先に述べたように、学習指導要領に、[言語の使用場面の例]及び[言語の働きの例]が初めて示され、さらに各科目の内容「(2)言語活動の取扱い」の「イ 言語の使用場面の働き」において、各科目においてどのような[言語の使用場面の例]と[言語の働きの例]を取り上げ、どのように扱うことが期待されているかが示された。

これは、コミュニケーションにおいては、常に、言語が具体的な場面において、具体的な働きを果

たすために使用されるので、「実践的コミュニケーション能力」の育成を重視する場合、「言語の使用場面と働き」を明確にとらえておく必要があるからである。

高等学校学習指導要領解説外国語編では、「言語の使用場面」と「言語の働き」について、それぞれ次のように説明されている。

言語の使用場面

言語が使用される具体的な場面

言語の働き

言語が使用される具体的な場面において言語が果たす機能、役割

この「言語の使用場面と働き」を考え、各科目の授業においてコミュニケーション活動を行う際には、[言語の使用場面の例]と[言語の働きの例]のうち、各科目の目標を達成するのにふさわしい、ある特定の「言語の使用場面」を選択し、その場面にふさわしい「言語の働き」を設定したり、あるいは逆に、ある特定の「言語の働き」を選択し、その働きにふさわしい「言語の使用場面」を選択して組み合わせることが求められる。

(2) 「言語の使用場面と働き」の例

ここでは、中学校と高等学校の指導のつながりを確認するために、それぞれの学習指導要領に示されている[言語の使用場面の例]と[言語の働きの例]を整理してまとめたものを示す。中学校と高等学校の学習指導要領に共通して示されているものについては、そのことが分かるようにゴシック体で示した。

[言語の使用場面の例]

中学校

a 特有の表現がよく使われる場面

- ・あいさつ ・自己紹介 ・電話での応答
- ・買い物 ・道案内 ・旅行
- ・食事 など

b 生徒の身近な暮らしにかかわる場面

- ・家庭での生活 ・学校での学習や活動
- ・地域の行事 など

高等学校

(ア) 個人的なコミュニケーションの場面：

電話、旅行、買い物、パーティー、家庭、学

校，レストラン，病院，インタビュー，手紙，電子メール など

(イ) グループにおけるコミュニケーションの場面：
レシテーション，スピーチ，プレゼンテーション，ロール・プレイ，ディスカッション，ディベート など

(ウ) 多くの人を対象にしたコミュニケーションの場面：
本，新聞，雑誌，広告，ポスター，ラジオ，テレビ，映画，情報通信ネットワーク など

(I) 創作的なコミュニケーションの場面：
朗読，スキット，劇，校内放送の番組，ビデオ，作文 など

[言語の働きの例]

中学校

a 考えを深めたり情報を伝えたりするもの
・意見を言う ・説明する ・報告する
・発表する ・描写する など

b 相手の行動を促したり自分の意志を示したりするもの
・質問する ・依頼する ・招待する
・申し出る ・確認する ・約束する
・賛成する/反対する ・承諾する/断る など

c 気持ちを伝えるもの
・礼を言う ・苦情を言う ・ほめる
・謝る など

高等学校

(ア) 人との関係を円滑にする：
呼び掛ける，あいさつする，紹介する，相づちを打つ など

(イ) 気持ちを伝える：
感謝する，歓迎する，祝う，ほめる，満足する，喜ぶ，驚く，同情する，苦情を言う，非難する，謝る，後悔する，落胆する，嘆く，怒る など

(ウ) 情報を伝える：
説明する，報告する，描写する，理由を述べる など

(I) 考えや意図を伝える：
申し出る，約束する，主張する，賛成する，反対する，説得する，承諾する，拒否する，推論する，仮定する，結論付ける など

(オ) 相手の行動を促す：
質問する，依頼する，招待する，誘う，許可する，助言する，示唆する，命令する，禁止する など

中学校と高等学校において共通して指導される「言語の使用場面と働き」の例は多い。高等学校においては，中学校で取り上げられた「言語の使用場面と働き」に一層慣れさせ，高等学校に加えて取り上げられている「言語の使用場面と働き」を，コミュニケーション活動を通して指導することが必要である。

また，「言語の使用場面と働き」についての配慮事項を表1にまとめた。学習指導要領における各科目の特色を十分に生かすためには，生徒の実

表1 各科目における配慮事項

科目	積極的に取り上げるよう配慮するもの
オーラルコミュニケーション	個人的なコミュニケーションの場面やグループにおけるコミュニケーションの場面
オーラルコミュニケーション	グループや多くの人を対象にしたコミュニケーションの場面や創作的なコミュニケーションの場面
英語	聞いたり読んだりした内容について，自分の意見をまとめ，それを発表するなど，総合的な言語活動の場面
英語	聞いたり読んだりした内容について，その要旨を書いたり，話し合ったりするなど，総合的な言語活動の場面
ライティング	手紙や電子メールなどの「言語の使用場面」

態や題材などに応じて、「言語の使用場面と働き」を適切に組み合わせて用いることによって、多様で自然なコミュニケーション活動を行うとともに、各科目の目標を達成することが大切である。

(3) 「言語の使用場面と働き」の設定

学習した言語材料を、現実的な使用場面の中で、どのように使うのかを生徒に理解させるためには、生徒の実態に応じた「言語の使用場面と働き」を設定する必要がある。

「言語の使用場面」を設定する際には、英国の学習指導要領というべき Modern Foreign Languages in the National Curriculum を参考にすることができる。この中で、言語の使用場面は、生徒の身近な場面から段階的に拡大して設定されている。このような設定の仕方は他の国でも採り入れられており、私たちの授業においても、言語の使用場面を設定する際の参考にできる。

「言語の働き」を設定する際には、言語材料や生徒の興味・関心を考慮し、具体的な「言語の働き」を実感しながらコミュニケーション活動を行うことができるように工夫することが大切である。

これらのことを踏まえた上で、「言語の使用場面と働き」の設定を十分な計画に基づいて行うことが不可欠であることは言うまでもない。高塚（2002）が述べているように、「『言語の使用場面』が異なれば、同じ言語材料であっても異なる『言語の働き』をすること、また、同じ『言語の働き』は、異なる言語材料でしか適切に実現できなかったりすること、さらには、同じ『言語の働き』や意味は、様々な言語材料によって複数の方法で伝えることが可能であることを、コミュニケーション活動の中で生徒が実感できるように指導すること」ができるように、年間指導計画の中でどのようにコミュニケーション活動を展開していくかを十分考慮することが必要である³⁾。

4 コミュニケーション重視の教授法 (Communicative Language Teaching)

ここでは、「言語の使用場面と働き」の概念の基になっているコミュニケーション重視の教授法について、その基本的な考え方をまとめるとともに、コミュニケーション能力を養うための指導の留意点についてまとめる。

(1) コミュニケーション重視の教授法の基本的な考え方

高塚が指摘しているように、学習指導要領に「言語の使用場面と働き」が示された背景には、「1970年代後半からイギリスを中心としてヨーロッパ各国で広まった、第2言語教育においてコミュニケーション能力の養成を重視する流れ、いわゆる Communicative Approaches や Communicative Language Teaching の影響」が強い⁴⁾。

大下（1996）は、コミュニケーション重視の教授法とは、Willkins や Van Ek の言語機能の分類や、場面や状況に応じた適切な言語使用を重視する社会言語学からの示唆を得て提案されるようになったコミュニケーション能力を重視する教授法であるとしている⁵⁾。さらに Brown（1987）を参考にして、コミュニケーション重視の教授法は、一般には次の四つの特徴を持つと述べている。

授業目標を伝達能力の獲得に置く。

授業では言語機能 (Function) を重視し、言語形式は言語機能の学習の中で教えられる。

授業では言語機能 (Function) よりも、言語使用の流暢さ (Fluency) に重きを置く。

授業では、学習者は言語を用いて即時に、話したり、聞いたり、読んだり、書いたりしなければならない。

学習指導要領においては、の伝達能力は「実践的コミュニケーション能力」、の言語機能は「言語の働き」に相当すると考えられ、コミュニケーション重視の教授法の影響を強く受けているものであると言える。

(2) コミュニケーション重視の教授法に基づく指導の考え方

「言語の使用場面と働き」を意識した授業づくりを行う際には、コミュニケーション重視の教授法に基づく指導が参考になると考える。以下に Larsen-Freeman と Littlewood による、指導の基本的な考え方を示す。

Larsen-Freeman の基本的な考え方

Larsen-Freeman が示している活動例、教師の役割と評価の留意点は次のとおりである⁶⁾。

【活動例】

Scrambled sentences (文の並べ替え)

生徒は文がばらばらにされた一節を与えられ、元の形に修復することを求められる。このタイプ

の活動により、生徒は文章には言語的つながりと意味的つながりがあることを学ぶことができる。

Language games (言語ゲーム)

ゲームはコミュニケーション重視の教授法でしばしば使用される。適切に考案されたゲームは生徒にとって効果的なコミュニケーション活動となる。

Role Play (ロール・プレイ)

ロール・プレイは、生徒に異なる社会的な状況の中で異なる役割に基づいてコミュニケーションを図る機会を与えてくれるのでコミュニケーション重視の教授法においては、特に重要である。

【教師の役割】

コミュニケーションが促されるような活動を設定すること

教師は、生徒の興味・関心を把握し、生徒が積極的に参加するコミュニケーション活動を設定することが求められる。また、生徒のコミュニケーション能力に応じて、生徒にあまり負担が掛からないよう、コミュニケーション活動の難易度を調整する必要がある。

生徒が自発的にコミュニケーション活動に取り組むことができるようにすること

教師は、生徒がコミュニケーション活動を行っている間は、助言者として行動し、必要に応じて生徒の手助けをするが、生徒の誤りを頻繁に訂正しない。誤りは、コミュニケーション能力を発達させる上で全く普通の現象として、寛容な態度で受け取るべきである。コミュニケーション活動中に気付いた誤りは、後に正確さを求める言語活動を行い、生徒にフィードバックすることも可能である。

【評価の留意点】

コミュニケーションの場面を設定すること

現実的なコミュニケーション場面を設定し、言語機能を習得できているか評価すべきである。例えば「書くこと」の評価を行う場合、実際に友人に手紙を書くなど、現実的なコミュニケーションの場面を設定することが大切である。

Littlewoodの基本的な考え方

池内(1991)は、Littlewoodの考える、聞く活動と、方法論的枠組みについて次のようにまとめている⁷⁾。

【聞く活動】

聞き取りは聞き手の能動的な参加を必要とする話し手の伝達内容を理解するために、聞き手は言語的及び非言語的な知識を積極的に用いなければならない。

能動的な聞き取りをさせるためには、話す活動と同様、コミュニケーションの目的を与えることによって学習者の動機付けを行わなければならない。

目的を持つことによって、生徒はどのような内容を聞き取らなければならないか、あるいは発話のどの部分が重要であるかということを確認して聞く活動に取り組むことができる。

【方法論的枠組み】

前段階的コミュニケーション活動とコミュニケーション活動を区分し、その方法論的枠組みを図2にのように考える。

前段階的コミュニケーション活動においては、教師はコミュニケーション能力を構成する知識や技術を取り出して、学習者に個別的に練習する機会を与える。したがって、学習者はコミュニケーションの特定の知識や技術について学習を行うこ

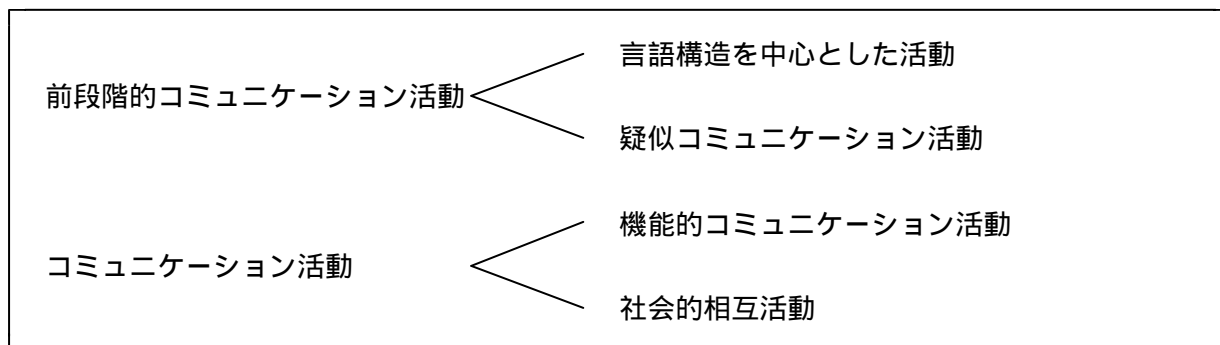


図2 Littlewoodの方法論的枠組み

とになる。ここでの、学習者の主な目的は、意味を効果的に伝達することよりも、一般に容認できる表現を用いる力を付けることである。この表現のコミュニケーションの部分的技術訓練は、将来、学習者が様々なコミュニケーションの目的のために、この表現を用いることができるようにすることをねらいとしている。

コミュニケーション活動においては、学習者は意味の伝達のために、自分の持っている前段階的コミュニケーション活動によって得ることができた知識や技術を活用し、それを総合して用いなければならない。したがって、学習者はコミュニケーションの総合的な技術を練習することになる。

そして、機能的コミュニケーション活動において、学習者は利用できるあらゆる手段を用い、最善を尽くしてコミュニケーション活動を行わなければならない。また、社会的相互活動では、コミュニケーションが行われる社会的状況も考慮することが求められる。学習者は、自分が用いる表現の社会的容認度を高めるために、特定の場面や人間関係において社会的に適切な発話を行わなければならない。

5 「実践的コミュニケーション能力」を養う授業についての基本的な考え方

「実践的コミュニケーション能力」を養うためには、その前段階として、コミュニケーション能力を構成する知識や技術に習熟させることが必要となる。ここで身に付けた言語材料が次の段階における実際のコミュニケーション活動に生かされるよう、指導内容を工夫していくことが求められる。

実際のコミュニケーション活動においては「言語の使用場面と働き」を生徒に明示した上で、「場面」と「働き」の組み合わせ等工夫することによって、年間指導計画の中で各科目の目標に配慮したコミュニケーション活動を取り入れていくようにする必要がある。

以上のことを実践していくために、まず生徒の実態を把握し、彼らの「実践的コミュニケーション能力」を育成するにはどのような「言語の使用場面と働き」を設定すればよいかということを中心に考慮する必要がある。その上で、それを生徒にいかにか明瞭に意識させ、コミュニケーション活動を行うかという工夫が求められてくる。

本研究では、生徒の実態に即した「言語の使用場面と働き」を設定し、これを効果的に生徒に示す実践を行うことにする。

実践事例について

3名の協力委員による実践事例を報告する。各学校の生徒の実態に合わせて、学習指導要領に示された「言語の使用場面と働き」と、その背景にあるコミュニケーション重視の教授法の考え方を基にし、「言語の使用場面と働き」に配慮した言語活動の工夫を行った。

「言語の使用場面」に関しては、「(ア) 個人的なコミュニケーションの場面」、「(イ) グループにおけるコミュニケーションの場面」、「(イ) 創作的なコミュニケーションの場面」の三つの場面を設定し、「言語の働き」に関しては、共通して「(ア) 人との関係を円滑にする」ことを扱った。これは、「実践的コミュニケーション能力」を養うためには、まず、身近な人間関係の中で、無理なく円滑にコミュニケーションが行える土台づくりが不可欠だと考えたからである。

1 実践事例 1

「言語の使用場面」は、「(イ) 創作的なコミュニケーションの場面」の中から、「スキット」を取り上げている。また、「言語の働き」は、「(イ) 考えや意図を伝える」の中から、「拒否する」、「(オ) 相手の行動を促す」の中から、「誘う」を取り上げている。スキットを行うこの実践の長所は次のようにまとめられる。

具体的な場面が設定されているので、相手との関係を意識しながら円滑に意思疎通をするための適切な表現を、会話形式で学習することができる。

自分たちでストーリーを考える過程において、生徒は自然な会話になるよう工夫をしながらスキット作りに取り組むことができる。

人前で発表する経験を積み重ねることにより、英語を話すことへの抵抗感を和らげることができる。

2 実践事例 2

「言語の使用場面」は、「(ア) 個人的なコミュニケーションの場面」の中から、「電子メール」を取り上げている。また、「言語の働き」は、

「(ウ) 情報を伝える」の中から、「説明する」「理由を述べる」等を取り上げている。電子メールを使用するこの実践の長所は次のようにまとめられる。

電子メールという、生徒にとって身近な媒体を利用することで、外国語を使用する意欲を高めることができる。

読み手に自分の意向が正しく伝わるよう、具体的な場面や状況に合った適切な表現を自ら考えることができる。

個々の生徒の学習内容の習熟の程度に合わせて、指導を行うことができる。

3 実践事例3

「(イ) グループにおけるコミュニケーションの場面」の中から、ディスカッションを取り上げている。「言語の働き」は「(イ) 気持ちを伝える」の中から、苦情を言うを取り上げている。ディスカッションを目指し、「"Active Listening"を利用した『話すこと』の指導」を行うこの実践の長所は次のようにまとめられる。

相手の意向を正しく理解していないと適切に応答することができないので、生徒は目的を持って聞く活動に取り組むことができる。

円滑にコミュニケーションを継続して行うために、聞き手も場面と状況を意識して、repetition, paraphrasing, summarizingを行いながら能動的に聞く活動に取り組むことができる。

様々なトピックを扱う中で、様々な「言語の働き」を段階的に取り入れた活動を設定することができる。

《実践事例1》 第1学年 スキットの創作により、「言語の使用場面と働き」を意識させる指導

1 指導上の立場

コミュニケーション活動を通じて実践的なコミュニケーション能力を養うためには、目標文を導入し、実際に練習をさせる際に「言語の使用場面」やその表現の「言語の働き」を意識させる必要がある。つまり、特定の場面で円滑に意思疎通ができるようにするためには、目標文の構造を理解させるだけでなく、いかに効果的にその目標文を使えばよいのかを学ばせる必要がある。

本実践では、ペアでスキットを創作させることにより、実際の「言語の使用場面」を意識させ、円滑なコミュニケーションを図る方策を学ばせることを意図した。目標文も丁寧さのレベルの異なる表現を提示し、円滑なコミュニケーションを目指すには丁寧さも考慮しなければならないことを考えさせた。また、言語的な表現だけでなく、円滑なコミュニケーションには会話の進め方も工夫する必要があることを理解させる指導にも重点を置いた。今回の「円滑な勧誘や断り」という「言語の働き」を指導する際に重要な方略は以下の2点である。

いきなり「どこかへ行きましょう」と誘うのではなく、その日の相手の都合を尋ねること。つまり、Pre-invitation も円滑に勧誘を行うには必要である。

相手の誘いを断る際には、具体的な理由を添えることが必要である。

高等学校第1学年の1学期の生徒の文法力や表現力は限られている。創造的で実際の「言語の使用場面」に近いスキットを発表させるために、提出させたスキットを添削した。また、返却の際に・の円滑に勧誘をしたり断ったりする方略を指導して、書き直しをさせた。さらに、クラスごとのスキット発表会で相互評価をさせる際に、評価の観点に円滑な誘い方・断り方という項目を入れ、スキットの内容だけでなく、会話の円滑さについても生徒に考えさせた。発表会でのクラスメートのスキットが「言語の使用場面と働き」を意識させる上で有効な教材になり、次回からの言語活動に生かすことが期待できる。

2 指導の実際

(1) 指導の概略

科 目 オーラルコミュニケーション

対象学年 高等学校第1学年

計 画 全4時間

第1時 ペアで異なる予定表を持ち、相手の都合を尋ねながら予定を立てる会話を練習する。ペアでスキット作りをする。

第2時 イベントガイドを見ながら週末の予定を立てる会話を練習する。ペアでスキット作りをする。

第3時 スキットの書き直しをする。スキット発表会に向けてペアで練習する。

第4時 スキット発表会を行う。ペアで教室の前に出て発表する。他の生徒は相互評価を行う。

(2) 指導の工夫

スキットは提出させて、表現や文法上の誤りを訂正する。生徒の優秀なスキットを紹介し、Pre-invitation を使った誘い方や丁寧な断り方に焦点を当てて、生徒作品のどの部分が優れているかを具体的に説明する。

より独創的なスキットを創作させるために、教師がスキットを実演し、状況を工夫したり、落ちを付けたりするよう指示する。生徒の創造性を刺激するようにユーモアやウィットに富んだスキットを生徒に見せる。今回は著名なサッカー選手とその妻の会話を衣装(ユニフォーム)や小道具(サッカーボール)を用いて実演することにした。

発表のための練習をさせる。Read and Look up で読み合わせをさせたり、効果的な小道具があれば準備をさせる。原稿は覚えて、できるだけ相手や聴衆を見てスキットを発表するよう指導す

る。

クラス単位でスキット発表会を開き，発表の機会を与える。生徒同士で相互評価を行う。

(3) 学習指導案

本 時 案 （第2時）		
学 習 目 標	週末の予定を立てる会話で，語句や表現を選択し，円滑に人を誘ったり，誘いを断ったりすることができる。（表現の能力）	
学習活動	教師の指導・支援	評価
1 本時の目標を知る。	人を誘ったり，人の誘いを断ったりする方法を学ぶことを知らせる。	
2 ダイアログを聞いて英語の質問に答える。	身振り，手振りや表情を工夫してダイアログの実演をする。質問への答えに生徒が詰まった際には，適切な援助をする。	
3 誘い，断りの効果的な表現を学ぶ。	プリントでダイアログのスキriptと目標文を示し，ダイアログの音読練習をさせたり，目標文を説明したりする。 目標文の説明の補足として，人を誘う際にはその日の相手の都合をまず尋ねる (Pre-invitation) が必要であることや，誘いを断る際には理由を添えて断ることが丁寧であることも説明する。	
4 イベントガイドで週末の予定を立てる練習をする。（ペアワーク）	生徒が興味を持って取り組めるように，自作のイベントガイドを与える。 必要な箇所を埋めれば会話が成立するような会話例を与える。ペアで空欄を埋めながら会話を完成させて，相手の提案を断ったり，待ち合わせの日時を決めたりする方法も練習させる。	適切な語句や表現を選択し，円滑に相手を誘ったり，誘いを断ったりしている。 （表現の能力） <活動の観察>
5 ペアでスキットを作る。	週末の予定を立てるスキットを作らせる。一度は誘いを断って，再提案で決まるような会話を作らせる。 Pre-invitation や適切な断り方ができているか，机間指導をしながら観察する。 語彙や表現で困っている生徒の質問に答えるなどして援助する。	
後日	生徒に提出させたスキットを表現，内容の適切さの両面から添削をして返却する。	適切な語句や表現を選択し，円滑に相手を誘ったり，誘いを断ったりしている。 （表現の能力） <ワークシートの点検>

(4) 第3時の書き直しによるスキットの主な変容

第1・2時におけるスキットの一例

A: Hi, Yasuo. How are you?
B: I'm fine, thank you, Koji. And you?
A: I'm fine, too. Do you want to play tennis next Saturday?
B: No. I don't like playing tennis.
A: Do you want to go to Tokyo Disneyland next Sunday?
B: Yes, I do. Where shall we meet?
A: How about at Okayama Station?
B: Okay. What time?
A: What about at nine o'clock?
B: Okay. Bye.
A: Bye.

特徴

- ・ 配布プリントの会話例の表現の多くをそのまま使う生徒が多い。
- ・ Pre-invitation の表現が使えていない。
- ・ 誘う際の表現に丁寧さが欠け、唐突な印象を受ける。
- ・ 断る際の理由があまりにも直接的なものが多く、丁寧さに欠ける。

第3時の書き直しのための指導内容

- ・ JTEとALTによるモデルスキットの実演をする。
- ・ 生徒の作品例(図3)にコメントを付けて紹介する。その際に Pre-invitation , 適切な理由を添えた断り方に焦点を置いた指導をする。

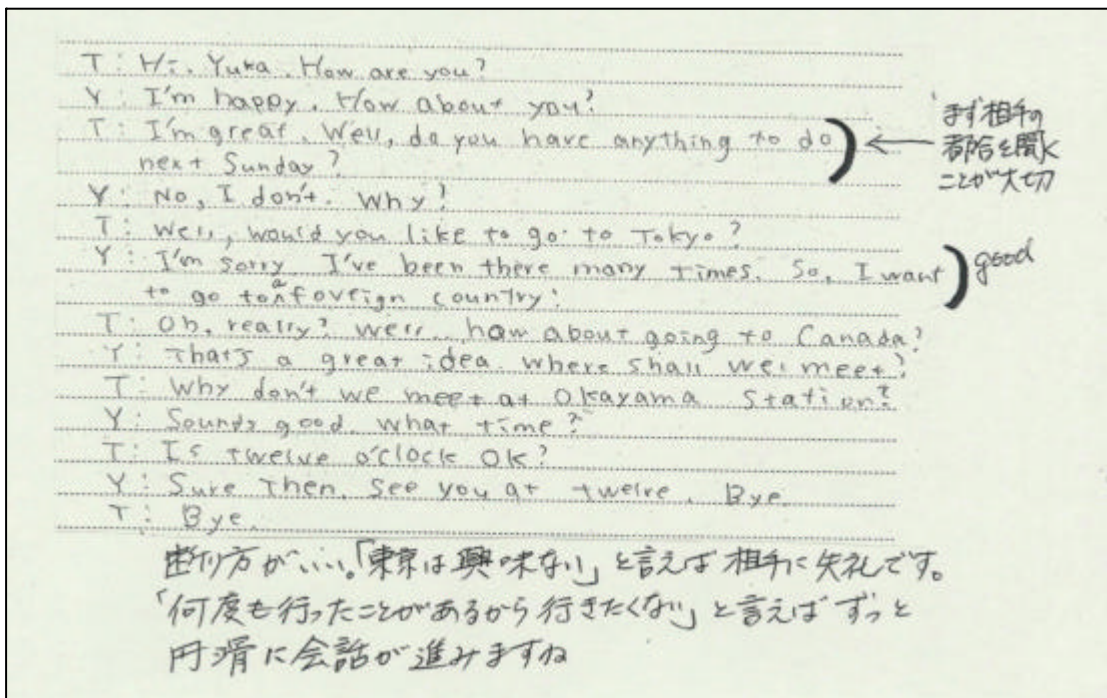


図3 生徒の作品例

スキット発表会におけるスキットの一例

A: Hi, how are you?

B: Well, it's very hot!

A: It's almost summer. (1) Well, what are you going to do next Saturday?

B: Nothing. Why?

A: Well, (2) would you like to go to catch insects on the hill?

B: I'm sorry. I don't like insects, (3) because I was stung all over my body by bees before. So I'm afraid of insects. But I like animals.

A: Oh, you like animals? Then, how about going to the zoo?

B: OK! That's a good idea. Where do you want to meet?

A: How about in front of the station?

B: Good. And what time? I want to go a little early.

A: Well, how about at nine o'clock?

B: OK. Then see you at nine o'clock. I'm looking forward to seeing you. Bye.

A: Let's enjoy next Saturday! Bye.

改善点

- ・ より具体的な内容をスキットに盛り込むことができるようになった。
- ・ Pre-invitation の表現が使えるようになった(下線部(1))。
- ・ 丁寧な表現も使えるようになった(下線部(2))。
- ・ 断る際の理由が具体的に became (下線部(3)) , 遠回しの表現が使えるようになったりする生徒も出てきた。
- ・ 誘ったり断ったりする会話にふさわしい登場人物や場面を考え、実際の英語使用に近い会話を創作することができるようになった。

3 結果と考察

スキット発表会後の授業でアンケートを実施した結果を図4～7に示す(回答198名)。図4から、ほとんどの生徒がスキット作りの活動は英語の学習に効果的だと考えていることが分かる。会話の形式で英語を使うことができることや、いろいろな会話の言い回しを学んだり自然な会話の流れを考えたりできるからといった理由であった。否定的な意見として、スキットは覚えたものを発表するだけだから、即興性に欠けるというものがあつた。

「実際の場面で英語を使うことを意識して英語学習に取り組むようになりましあか」という項目に対しては、「はい」と回答した生徒が43%、「少し/まあまあ」と回答した生徒が38%であつた。また、スキット作りをしてよかつた点として、「自分や他のペアのスキットから具体的な誘い方・断り方が学べた」というものが多数あつた。

スキット作りが効果的な学習であると回答した生徒が多かつたのは、スキットをペアで考えさせた後にスキットコンテストという発表の場を設定したことも理由の一つであらう。生徒はスキットを考えて書くだけでなく、ペアで発表の練習をしたり、他のペアの発表を相互評価する過程でより現実的な言語使用を意識したのではなかつたか。また、発表会ではストーリーや演技に工夫したものがあつた、大変盛り上がったこともアンケート結果に反映したかもしれない。

スキット作りの利点は中学生から上級者まで英語のレベルに応じて活動を設定することができるのが利点である。今回は書き直しの指導によって円滑な言語使用を考えあつたスキットを目指した。最初は、教師の



写真1 スキットの発表

提示したモデルダイアログに表現や内容に近いものが多かったが、書き直しにより、現実の使用により近い独創的なスキットを作ることができたと考えられる。生徒の多くが丁寧な表現を使ったり、自然な誘い方や断り方がスキットの中でできたのは確かである。しかし、スキットの活動自体に即興性はなく、実際のコミュニケーションで円滑な表現が使えるようになったかどうかは実証できない。継続的に指導を行っていくことも大切であるし、スキット以外にロールプレイや問題解決型のタスクを与えていくことが有効であると考えられる。

また、図5～7に示しているように、「人を誘う際の Pre-invitation の表現が分かりましたか」、「理由を添えて誘いを断る丁寧な表現が分かりましたか」という項目に対しては、80%以上の生徒が肯定的な回答をしている。さらに、「Pre-invitation の表現や理由を添えた断りの表現がスキットで使えましたか」という項目に対しては、90%以上の生徒が、肯定的な回答をしている。これはスキット作りは言語を使用する際に円滑さを生徒に意識させるために有効な活動であることを示している。今後、難易度のより高い状況・場面でスキットを作らせてみたい。それと同時に、英語の表現力や理解力を身に付けさせることや、円滑に会話をつなぐ表現なども少しずつ授業で教えていく必要がある。

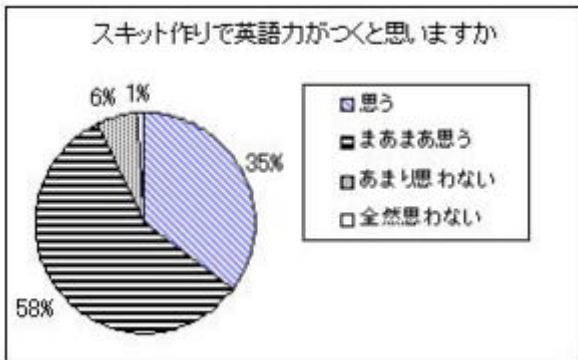


図4 英語力について

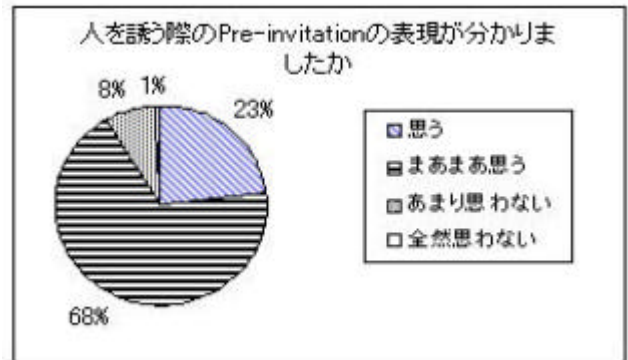


図5 Pre-invitationについて

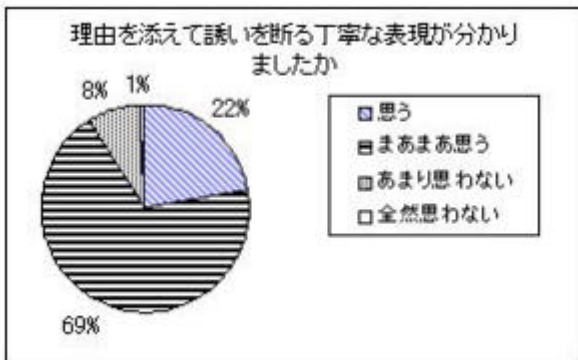


図6 理由を添えることについて

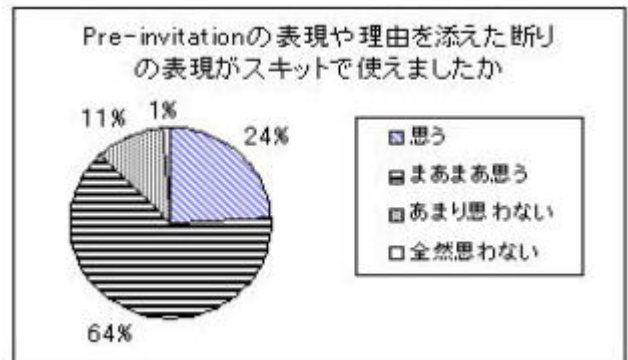


図7 円滑な表現について

1 指導上の立場

「ライティング」の授業において、生徒はふだんから英語で「書くこと」を学習しているが、実際に授業の中で「書くこと」を通して英語でコミュニケーションを図ることは少ない。したがって、円滑にコミュニケーションを図る段階には至っていない。生徒自身が「言語の働き」を意識して英語が使えるようにするために「電子メール」という「言語の使用場面」の中で、様々な状況を設定し、授業の一部を利用して電子メールを書くことを試みた。電子メールを選んだ理由は、個人的なコミュニケーションの場面の中で、生徒にとって最も身近で、実践的なものに近いということである。実際に電子メールを送受信することで書くことによるコミュニケーションの楽しさを体験させ、英語学習に対する更なる動機付けとしたい。また、活動を継続することにより、扱う言語材料の定着も期待できる。



写真2 メールの下書き

もちろん、これまでノートに書いていたのと同じものを電子メールに置き換えるだけでは、生徒にとっては単なるもの珍しさに終わってしまう。そこで、次の2点について工夫することで、円滑なコミュニケーションが可能になると考えた。

相手からの情報に対して、自分の感情や意見を表現する。

話題を変えたり、内容に変化があったりするとき、前置きを入れる。

自分の伝えたい内容を書く前に の活動をすることによって、書き手の一方的な情報伝達ではなくなる。また、 の活動によって、相手はこれから受け取る情報を読む準備をすることができる。

2 指導の実際

(1) 指導の概略

科 目 ライティング

対象学年 高等学校第2学年 選択者

計 画

ア 様々な「言語の働き」を意識して、伝える内容を想定する。情報通信ネットワークを利用して取り上げやすい働きを考えた場合、次のようなものが考えられる。

- | | |
|----------------------------|----------------------------------|
| [1] Saluting (あいさつ) | [11] Expressing Emotions (感情表現) |
| [2] Introducing (紹介する) | [12] Appointments (約束をする) |
| [3] Greeting (グリーティング) | [13] Invitations (招待する) |
| [4] Thank you (お礼を言う) | [14] Proposals (提案する) |
| [5] What I am doing (報告する) | [15] Orders (注文する) |
| [6] Explanations (説明する) | [16] Claiming (苦情を言う) |
| [7] Inquires (用件を伝える) | [17] Recommendations (忠告, 推薦する) |
| [8] Apologies (謝罪する) | [18] Negotiating (交渉する) |
| [9] Replies (返信する) | [19] Making decisions (意思決定を伝える) |
| [10] Follow Up (確認する) | |

本時では[2]Introducing (紹介)を取り上げた。

イ アで想定した内容について、電子メールを用いて表現する。

ウ 実際に電子メールを送信し、自己評価をする。

(2) 指導の工夫

複数の電子メールの送信先を想定する。

実在の人物（ALT）に加え、架空の電子メールの受信者も登場させることにより様々な使用場面の設定が可能になる。

「言語の働き」と言語材料をリストアップする。

2～3段階に難易度を設定し、生徒の力に応じた目標を二つ設定する。一つは全員共通のものを教師が示し、もう一つは生徒自身が各自で個別の目標を設定する。

可能な限り教科書で扱う言語材料を使えるよう配慮し、言語材料の定着を図る。

使用場面の設定を工夫することにより、多くの働きを取り上げる。

タイムリーな話題を中心に平易な働きから順に扱うよう心掛ける。本時では、「学校の先生を紹介する」という状況を想定する。

円滑なコミュニケーション活動となるよう配慮する。

本時では、下書きの添削時に、「相手の学校の先生に関する自分の印象」と「自分の学校の先生を紹介する前に前置きをする」について助言する。

生徒が明確に意識できるよう、活動を行うに当たり取り扱う「言語の働き」を明示する。

一部のみを書かせる、内容をあまり複雑なものにしない等、生徒の負担にならないよう配慮する。

(3) 評価規準

評価の観点	学習活動における評価規準
表現の能力	「電子メールで第三者を紹介する」という活動において、適切な語句・表現を用いて、自分の感情や考えが相手に円滑に伝わるように、表現している。

(4) 学習指導案（一部略）

本 時 案		
学習目標	適切な語句・表現を用いて、自分の感情や考えが相手に円滑に伝わるように、表現することができる。（表現の能力）	
学習活動	教師の指導・支援	評価
1 想定場面を知る	想定場面「メールフレンドから自分のお気に入りの先生を紹介するメールが来た それに対して自分の学校の先生を紹介する」を提示する。	適切な語句・表現を用いて、自分の感情や考えが相手に円滑に伝わるように、表現している。 (表現の能力) <記述の内容>
2 目標記入	評価カードを配付し、目標を記入させる。 共通の目標・・・「先生を紹介する」 個別の目標・・・「あいさつができる」「先生について詳しく説明できる」「理由が説明できる」等	
3 下書き	下書き用紙を配付 表現例リスト（Saluting, Introduction）や参考となる教科書の該当ページを知らせる。 机間指導し、「相手からの情報に対する自分の感情や意見」、「自分の先生を紹介するときの前置き」、「紹介内容等」について個別にアドバイスする。	
4 送信	下書きが完了した生徒から順次入力・送信するよう指示する。	
5 自己評価	それぞれの項目についてA B Cで自己評価を記入させ、感想を書かせる。 評価カードを回収（教師がコメントを記入し次回返却）する。	

(5) 使用教材
下書き用

To: < @ .com>
CC:
Subject:My favoriteteacher

Hi ,
Howare you doing? IsithumidinOkayama?
Today, I would like to introduce my favorite teacher,
Mr. Wood. He is an interesting andpopular teacher.
He teaches us home economics four hours a week.
He isfullofenergyandseemstobeenjoyinghisjob.
Yesterday we learned how to make fried chickens.It
was fun to cook and eat with classmates. Mr. Wood
told me it was essential to enjoy balanced meals
every day.
Canyoutellmeaboutyourfavoriteteacher?
I am lookingforwardtoyourreply.

Anthony

To: < @ .com>
CC:
Subject:My favoriteteacher

Hi ,
(あいさつ)
Yes,itisstillhumidinOkayama..
(Mr. Wood について)

(先生の紹介)

I will writetoyousoon.

名前

生徒が実際に送ったメール

From: "〇〇〇〇" <〇〇〇@〇〇.com>
Subject: My favorite teacher
To: green〇〇〇@〇〇.com

Hi!,Anthony,What's up?
I think Mr.Wood is nice too.
Now, let me introduce my favorite teacher.
Mr.〇〇,our viceprincipal, is kind enough to look after
our △△ studying.
He closely resembles 〇〇.
We love him very much!
I'll write to you soon.
Bye!

〇〇〇

(6) 生徒の感想

肯定的な意見

- ・ 実際に英語を使ってコミュニケーションをしているような気になった。
- ・ 書くよりもタイプを打つのが楽しかった。
- ・ 自分でペンパルを見付けて、プライベートでも電子メールを交換をしてみたい。
- ・ 返信を読むのが楽しみ。
- ・ 授業でやった表現を使うことができた。
- ・ 最初は少しだけだったが、だんだん書く量が増えてきた。

否定的な意見

- ・ 家でインターネットができないので、自由に返信を読むことができない。
- ・ 携帯電話を利用することもできるが、英文入力に慣れていないので大変そう。

3 結果と考察

ほとんどの生徒がWebメールを利用するのが初めてだったので、メールアドレス取得と利用方法のオリエンテーションにかなり時間を要してしまったが、慣れてくればわずかな時間で入力・送信ができるようになった。同じ内容でもノートに書くより、実際にコンピュータを利用した方が、生徒は生き生きとしていたように感じられる。コミュニケーションのツールとして英語を使っていると意識できたのではないだろうか。生徒が実際に送ったメールに対しては、それぞれに返事を書いて返信した。もちろんALT以外は架空の人物であるということを生徒は承知しているが、ゲーム感覚で楽しんでいた。

対象の講座は1時間当たり45分間で2時間連続の授業なので、途中の休憩時間(10分間)も下書きの添削指導等に利用でき、時間的にかなり余裕があった。生徒の数も14人と少ないので1回の活動で一つの場面設定に対し、下書きからメール送信まで可能であった。同じ活動を40人クラスでするとすればすれば、例えば1回目は下書きまでで、次回までに教師が添削しておき、2回目で実際にメールを送信するなどの工夫が必要になるだろう。



同じ講座の選択者でも生徒の習熟度にはかなりの差があるが、大多数の生徒がこの活動に積極的に取り組むことができた。この活動を導入した当初は、全員に対し共通の目標を設定していたので、つまらないと感じたり、難しすぎると感じたりしてしまい、活動に取り組む意欲が減少することもしばしばあった。そこで、2～3段階に難易度を設定し、個々の力に応じた目標を生徒自身に設定させた後に活動に取り組ませることにより、ほとんどの生徒がこの活動に対し積極的になった。さらに、目標の中にその日扱う「言語の働き」を明示するようにすることで、その働きを意識したメールの作成ができるようになった。

また、この活動は個々の生徒に対応できるので、それぞれの習熟度のレベルに応じた指導が可能である。今後家庭において更にインターネットが普及し、学校においても、生徒にとって情報通信機器を使用しやすい環境が現在よりも整備されれば、更なる効果が期待できると考える。

写真3 メールを送受信の様子

1 指導上の立場

本校での「言語材料」を選定して「言語の使用場面」を決定するという指導では、生徒が話したい内容や「言語の働き」が狭められ、実際のコミュニケーション活動とは乖離することが多かった。そこで、今回の指導では、まず生徒に「言語の働き」の例を与え、「言語の使用場面」についても複数のものから自由に選ばせるようにした。

また、コミュニケーションの円滑さという観点より「相手に気持ちよく話をさせる」にはどうしたらよいか、という課題も同時に与え、指導を加えた。このことによって生徒が、「言語の働き」を果たしながら円滑にコミュニケーションを図るにはどうしたらよいかということに注意を払い、授業中のコミュニケーション活動が使用語彙・表現等を限定された上滑りのコミュニケーション活動に終わらないことをねらった。

2 指導の実際

- ・科目 英語理解
- ・対象学年 高等学校第3学年

(1) 事前指導

「言語の働き」

日常生活で「言語の働き」はたくさんある。しかし、生徒のスピーキング能力の伸長度に合わせて細かいステップを踏ませながら「言語の働き」を習得していく方を講じることが、生徒の味わう達成感という視点からも重要である。そのために、「言語の働き」ならば何から始めてもよいということではなく、例えば「描写すること」から始めて、「誘う」「質問する」「理由を述べる」「約束する」「依頼する」「苦情を述べる」といったように徐々に「言語の働き」のレベルを上げながら指導を加えていく必要がある。

学習指導要領解説においては「第7節 言語の使用場面と働き」の「3 [言語の働きの例]」の取扱いの中で、「(ア) 人との関係を円滑にする」「(イ) 気持ちを伝える」...といった分類しかなされておらず、それぞれの分類において「言語の働き」を意識できるようにするために、どの働きから指導していくのが最もふさわしいのかについては触れられていない。そこで、本実践では「英語オーラル・コミュニケーション講座(実践準備コース)」を参考に指導に当たった。

円滑さ

円滑にコミュニケーションを図るための工夫は、母語を話す場合は無意識的にもあるいは意識的にも行われていると思われるが、外国語を習得する際にはこれまで指導がなされていなかった部分である。しかしながら、「言語の働き」が「依頼する」「苦情を述べる」というレベルになると、「円滑さ」抜きには自然なコミュニケーションは成り立たないと考える。

そこで本実践においては「意味の交渉」に焦点を当てた。「意味の交渉」とは、clarification request (相手の発言内容を明確に理解するために質問や聞き返しをすること)、confirmation check (相手の発言内容を自分が正確に理解できているかどうか確かめること)、comprehension check (相手が自分の発言内容を正確に理解しているかどうか確かめること)である。これらは、円滑なコミュニケーションを図るために必要なことであり、この考えを参考に、相手の言うことを繰り返したり要約したりしながら「相手に気持ちよく話をさせる」ための工夫をする指導を加えた。指導に当たって参考にしたのは、NHKテレビ「英会話エンジョイ・スピーキング」である。

この番組は、NHK教育テレビで毎週20分間放送されている。ニューヨークの語学学校が舞台であり、そこでの授業風景を放送するのであるが、講師が巧みに生徒に発話を促したりする様子がふんだんに盛り込まれており、大変参考になる。この放送の中で強調されているポイントの一つがコミュニケーションの際の「円滑さ」である。番組の中で講師は円滑なコミュニケーションを図るための工夫として、“Active

Listening”の重要性を強調している。本実践の中でも、生徒に放送の中に出てくる表現を中心に指導し、‘A good listener is also a good speaker.’を体験させるよう工夫した。以下に、指導のポイントを2点述べる。

ア Restating someone's ideas

- (ア) repetition (相手の言ったことの一部またはすべてを繰り返す。)
- (イ) paraphrasing (相手の言ったことを別の表現で言い直す。)
- (ウ) summarizing (相手の言った内容を自分のことばでまとめ直して言い直す。)

“Active Listening”とは黙って静かに聴くのではなく、「能動的に聴く」ことである。「どれだけ聞き取れたか、理解できたか」などで評価せざるをえない従来の Listening 指導では、テープなどを聴いて選択式の問題を解くような passive な指導になりがちである。

現実の世界（実践的なコミュニケーション）で試される Listening の力はそれとは異なるものである。実際の会話では、上手に相づちを打っているか、タイミングよく話者とのキャッチボールができていくかどうかで、聞き手としての評価は決まる。相手が再び何か言い始めそうだったら、聞き手は restate するのをやめる。そうやって、話者に気持ちよく話をさせる。つまり円滑にコミュニケーションを運んでいくのである。

イ Follow-up questions---“We just go along with things.”（成り行きに任せる）

自分の質問に相手が答えたら、何と応じるべきか。単に Yes. / I see. / OK. と言うだけでは、会話は続かなくなってしまう。そこで、相手の答えに関連した質問をしていく訳である。

相手が話している内容に注目しながら、自分が次に聞く質問を考えるのは大変であるが、例えば、簡単に Why's that? / What do you mean? のようにもっと詳しく話をしてくれるように頼むだけでもよい。

(2) 評価規準

網掛けの部分の部分が円滑さにかかわる評価規準である。

評価の観点	学習活動における具体的な評価規準
ア 関心・意欲・態度 【話すこと】	【言語活動への取組】 「苦情を言う」という function を果たす活動において、学習した表現を用いて積極的に会話に参加している。 【コミュニケーションの継続】 会話をする相手との関係を円滑にする工夫(restating, follow-up questions)をしながら、相手に気持ちよく話をさせる努力をし、不自然な沈黙をせず話し続けている。
イ 表現の能力 【速読】	【正確な要約】 知っている語句や表現を用いて、文のつながりや構成に注意しながら、要約文を正確に書くことができる。 【適切な要約】 50語程度で、英文全体の概要や要点を適切に伝えることができる。
ウ 理解の能力 【速読】	【正確な読み取り】 400語程度の英文を速読し、情報や考えなど書き手の伝えようとするを正確に理解することができる。 【適切な読み取り】 適切な速さで英文を読んで、概要や要点をとらえることができる。
エ 知識・理解 【速読】	【言語についての知識】 速読に必要な読解のスキル（パラグラフ構成等の理解、スキミング、スキミング）を身に付けている。

(3) 指導と評価の計画

網掛けの部分が円滑さに焦点を当てたコミュニケーション活動である。

	学習活動	本課の評価規準との関連	評価
ねらい	<p>400語程度の英文を読み、その概要や要点を正確に把握することができる。</p> <p>読んだ内容について、50語程度の英語で要約することができる。</p> <p>「苦情を言う」というタスクに積極的に取り組んでいる。</p>		
Interactive Activity (15)	<ul style="list-style-type: none"> ALT の指示で、「苦情を言う」タスクにペアで取り組む。その際、話し手は聞き手から比較、対照する、反対意見を述べる、体験談を語る（ナレーション）、といった別の「言語の働き」を引き出すように注意して、「苦情」そのものだけでなく、それに対する理由付けをして述べるようにする。また、聞き手は、相手との関係を円滑にする工夫（restating, follow-up questions）をするよう注意する。 数人指名し、クラスで発表させ JTE, ALT がコメントを加える。 	アの ,	活動の観察
Presentation of New Words (10)	<ul style="list-style-type: none"> Unit 44 'A Pest Problem' の語彙について、プレゼンテーションソフトで提示された例文を読み、語の意味を推測する。 		
Previewing (1)	<ul style="list-style-type: none"> JTE の指示で、Unit 44 'A Pest Problem' の Previewing を30秒間行う。 		
Fast Reading (9)	<ul style="list-style-type: none"> JTE の指示で、Unit 44 'A Pest Problem' の本文を速読する。順次読み終えた生徒から、Reading Time を記録し、次ページの設問へと進む。そして、設問を解き終えたら、Comprehension Score を記入し、さらに、Progress Graph に記入する。 		
Summarizing (10)	<ul style="list-style-type: none"> Unit 44 'A Pest Problem' の要約文をワークシートに50語程度の英文で10分程度で書く。 ワークシートを提出する。 	イの ,	ワークシート
Consolidation (5)	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の要約例をプロジェクトで提示し、JTE, ALT がコメントを加える。 ALT による Unit 44 'A Pest Problem' の要約例を聞く。 		
後日	<ul style="list-style-type: none"> 速読に必要な読解のスキル（パラグラフ構成等の理解、スキミング、スキミング）などを用いながら、まとまりのある英文を読んで、その概要や要点を読み取る。 	ウの , エの	ペーパー・テスト

ここに示した例は、「速読」と「Interactive Activity」という二つの異なる活動を1時間の中に組み入れたものである。

「Interactive Activity」において、コミュニケーションの「円滑さ」に焦点を当て、「言語の働き」を「苦情を言う」に設定した上で、「言語の使用場面」については次のような指示を記したワークシートを事前に生徒に配布し、準備をさせて授業に臨ませた。

次のようなものに対して「苦情」を言ってみよう。その理由を付けるのも忘れずに。まず、この用紙に書いてから自分で声に出して言ってみよう。

- 1) Something on TV
- 2) A situation in your town
- 3) Something you have to do, but don't want to do

(4) 評価

授業の始めの部分で行うこの活動は、評価も行うので、ペア・ワークを行う前に各自で用意してきた「苦情」を声に出して読む練習を十分にさせた。その後「指導と評価の計画」に示したことを生徒に口頭で注意しながら、ペア・ワークを行った。その際、教師はALTと協力しながら評価規準「アの 、 」について「積極性」と「継続」を観察に基づいて「 、 × 」で評価した。

その後、机間指導を行った際に、モデルとしてふさわしい「苦情」を探しておき、複数指名し全体の前で発表をさせた。その際、聞き手となる生徒は指名された生徒に選ばせ、聞き手に選ばれた生徒は積極的に会話にかかわるようにさせた。全体へのフィードバックが目的であるから、ここでは評価はしなかった。

このタイプの授業は、異なる「言語の働き」と「言語の使用場面」を選択し実施することで、同様の評価規準で複数回評価することができる。そうした評価の蓄積を学期ごとあるいは考查ごとにA、B、Cの評価へと総括していくのである。

3 結果と考察

「円滑なコミュニケーション」を図るための工夫に焦点を当てた言語活動を行った生徒からは次のような感想が寄せられた。

「積極的に会話に参加する態度が養われた。」「今までは、ALTの先生と会話をしていてもずっと聞き手に回ることが多く、相手の話が終わるとそこで会話が終了することが多かったが、聞き手に回っていても相手の言った内容をこちらから確認するだけで、会話は次につながっていくということが分かった。」
「“Active Listening”を行うと、自然な会話になっているような気がする。」

今回の interactive なコミュニケーション活動において、“Active Listening”を行う際には、improvisation が必要不可欠であるということを生徒に実体験させることができた。会話例文の reproduction は、どれだけ正確にできたとしても、その会話は実践的なコミュニケーション活動とはほど遠いものであるということが生徒に認識されたと考えられる。

今後の課題は、「言語の働き」を設定し「言語の使用場面」と有機的に組み合わせるために、「言語の働き」の指導は何から始めるのが最も有効であるのかを検証していくということである。また、同時に“Active Listening”を実践することで、「意味の交渉」を行いながら生徒にどのような力を身に付けさせたいのかをもっと具体的に提示することが必要であると考えられる。

おわりに

平成14年度に国立教育政策研究所が実施した「教育課程実施状況調査（高等学校）」によれば、「英語で自分の考えや気持ちを伝えることができるよう、英語の勉強をしたい。」という設問に対し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた生徒は、全体の57.6%に上っている。「実践的コミュニケーション能力」の育成の在り方は、そのような生徒たちの思いにこたえるためにも常に工夫・検討がなされるべき重要なテーマであると言えよう。先に紹介した三つの実践は、英語で相手とコミュニケーション

を図りたいという生徒の気持ちにこたえるための工夫が「言語の使用場面と働き」の設定において具体化されており、大変参考になるものである。今後は、このような実践を年間指導計画の中で適切に位置付けていくための長期的方略について考察していくことが求められる。

このような一つ一つの工夫こそが、生徒の英語学習に対する意欲を更にかき立て、それが「実践的コミュニケーション能力」の育成につながっていくことを忘れず、日々、授業に向き合っていかなければならない。

引用文献

- 1) 文部省：高等学校学習指導要領解説外国語編，開隆堂出版，p11，1999
- 2) 新里眞男：高等学校新学習指導要領の解説 外国語，学事出版，p22，2000
- 3) 高塚成信：高等学校新学習指導要領の解説 外国語，学事出版，pp128-129，2000
- 4) 同上書³⁾，p125
- 5) 大下邦幸：コミュニケーションを高める英語授業，東京書籍，p9，1996
- 6) Larsen-Freeman, D, Techniques and Principles in Language Teaching. (Second edition), Oxford University Press, 2000, pp128-134
- 7) ウィリアム・リトルウッド (Littlewood, William T.) / 池浦貞彦監修：コミュニケーション重視の言語教育 - 理論と実践 - ，開隆堂，1991

参考文献

- ・ 松畑熙一：英語科教育法読本，大修館書店，1985
- ・ 東眞須美：英語科教育法ハンドブック，大修館書店，1992
- ・ マーヴィン・ルイス (Mervyn Lews) / 平埜雅久監修：英語オーラルコミュニケーション講座実践準備コース，アルク，1999
- ・ 田中正道：英語の使用場面と働きを重視した言語活動，教育出版，2000
- ・ 新里眞男：改訂高等学校学習指導要領の展開 外国語（英語）科編，明治図書，2000
- ・ 高橋一幸：授業づくりと改善の視点，教育出版，2003
- ・ 国立教育政策研究所：平成14年度教育課程実施状況調査（高等学校），国立教育政策研究所教育課程研究センター，2002

Webページ

- ア) 文部科学省：「英語が使える日本人」の育成のための行動計画
(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/03033101.htm)
 - 1) 文部科学省：英語指導法等改善の推進に関する懇談会（報告）
(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/13/01/010110.htm)
-

平成15・16年度岡山県教育センター個人研究
高等学校外国語協力委員会

協力委員

小橋雅彦	岡山県立岡山城東高等学校教諭
田中信男	岡山県立備前緑陽高等学校教諭
谷川淳	岡山県立瀬戸高等学校教諭

なお，岡山県教育センターでは，次の者が本研究に当たった。

小寺邦彦 教科教育部指導主事（主査）

平成17年2月発行

研究紀要第262号

**「言語の使用場面と働き」を意識した
学習指導の工夫に関する研究**

編集兼発行所 岡山県教育センター

〒703-8278 岡山市古京町二丁目2番14号

TEL (086)272-1205 FAX (086)272-1207

URL <http://www.edu-c.pref.okayama.jp/>

E-MAIL kyoikuse@pref.okayama.jp